# “退屈を知らない男”です。

PROFILE

西山 幸光
（有）西山商店　取締役、当協会青年部会統括幹事を務める。
生まれ　／　昭和33年2月 大阪府
血液型／O型
信条／自分の一生は良かったと思える人生を過ごすこと
夢／自然体で暮らすこと。
嫌いなこと／うそを言って人をだますこと。

今回は自宅へ招かれてのインタビューです。ご主人の思いもかけぬ早い時間の帰宅に、喜んで走り回る二匹の犬にじゃれつかれつつ、まずはガレージの秘蔵マシンを拝見。そこにはホンダビートに加え、オフロードレース用の二台のバイクが。西山さんの名人・達人ぶりはモータースポーツにあり？

## 趣味はこだわり続けて、道楽の域へ。

――きれいですねぇ、このクルマ。

西山取締役（以下西山に略）『6千キロしか乗ってませんからね。みんな売れ売れ、っていうけど売りません。ずっと持ってるつもりです。』

――このバイクでレースに出るんですか。

西山『そうです。オフロードですけどね。車に積んでいって山を走ったりもしますよ。この白いのがKTM（オーストリア製）。こちらがIT200（U・Sヤマハ製）です。』

――わぁ、本格的ですねぇ。このガレージが西山さんのプライベートルームといったところですか。

西山『子供の頃から家を持ったらガレージを造るのが夢だったんですけどね、全部人に頼むとお金がかかるでしょ。自分でできることは自分で何とかやりました。ここでバラシたり組んだり、いろいろやってます。』

（このあと家の中のコレクションルームへ。玄関にも廊下にも、趣のある絵やリトグラフが飾られており、ひとつひとつを楽しそうに説明してくれる。話しぶりから趣味は、車やバイクだけではなさそう…。2階の6畳ほどの部屋に通される。）

――あらぁ、たくさんの本！小説・宗教・ノンフィクション。小道迷子さんの漫画まであります ねぇ。

西山『本が好きなんですよ。母が本好きだったせいもありますけどね。僕、大学が2部で、昼間は会計事務所で仕事してましたから、遊びに出る時間がなかったんです。それもあってよく読むようになりましたね。本屋で目につくものを買ってきますから、こういうふうになっちゃうんです。』

――これはマッキントッシュのパソコンですね。

西山『今ではこの型はオールドタイプですが、時々これで遊んでます。このベンツね、明治天皇が御料車に使ってらっしゃったベンツのミニチュアです（と、ミニチュアカーが　ズラリと並べられた戸

棚をあける)。これがヒットラーのベンツ、こちらが石原裕次郎が乗ってたヤツですね。』

―― ステキなコレクションですね。車関係の図鑑なんかも多い。こうしたものを集めるのは大変でしょう。

西山『ええもう、お金かかってしょうがないですよ(笑)。』

―― するとこれは趣味から道楽の域に入ってると言えますね。

(場所を居間に移して)

―― お仕事、お忙しいと思いますが、好きなことを楽しむ時間は取れますか。

西山『ええ、よほどの仕事がない限り、土・日は休めますからね。バイクを山へ持っていって練習してます。』

―― バイクのレース歴は長いんですか。

西山『高校時代からですね。ところが僕は、レースで競り合いになると、一歩引いちゃうんです。競り合いの一瞬で、ケガすると仕事にさしさわりがある、なんて考えてしまうんですね。それにオートバイでケガすると、遊んでケガしたっていうことになるから、あとがツライですよね。今は林道とかオープンエリアみたいなところを走るのが好きです。アメリカとかいいですね。』

―― レースでひどいケガをなさったことがあるんですか。

西山『レースでひどいのはまだないです。中学の3年の時に新聞配達のアルバイトをしてたんですが、その時にたまたま人の運転するバイクの後ろに乗ってて、転んで入院したことがあります。おかげで修学旅行に行けなかったんですよ。』

―― 免許取る前にそんなひどい目にあったのに、バイクに乗りたかった?

西山『バイクはやっぱりいいですよ。車と違って体が外に出てるでしょ。道路のクッション、対向車、いろんな情報が直接伝わってくる。自分が一番弱いって感じるんですね。だから乗ってると考えごとをしない。それがいいんですね。』

―― 無我の境地ですか。

西山『いや、ノンビリ山なんかを走ってる時は“桜が咲いたなぁ”とか“空がキレイだなぁ”とか、考えるというより感じるんですよ。街の中ではないですけどね。去年は5月の連休に、長野を走りました。なるべく除雪してあるところを選んで走っ

たんですが、滑ってコケましたねぇ。まぁ、でも、山はホントに好きです。』

——私なんかは、映画を観にいくのでも、旅行をするのでも、その楽しみを分かちあったり、盛り上げあったりする誰かが一緒でないとダメなんですね。西山さんは仲間もいらっしゃるけど、一人であちこち探訪されるのもお好きなんですね。一人の醍醐味ってどんなものでしょう。

## 好きなことをトコトンしていれば、退屈なんてしません。

西山『一人は楽しいですよ。いろいろ気付くことがあるんです。山で一人でテントなんか張ってると、コワくてしょうがないんです。人間って弱いなぁ、と思うんですね。野生の動物とか襲ってきたら、ひとたまりもないでしょう。僕らは、普段いろんなものを背負ってますでしょ。見栄とか意地とか。ところが山に一人で4～5日もいると、そんなもの、あとかたもなくなってしまう。自然の前には無意味ですからね。色々な垢がたまると、また行きたくなる。』

——身軽になる快感ですね。

西山『そうです。楽しいです。自分しかない、言い訳きかない、道をまちがえても、スプーンを忘れても、誰のせいでもない。自分のせいなんですね。車でどこか行く時は、車という箱が、ある程度は自分を守ってくれますが、バイクで山へ行く時は、いろんな条件が、すべて自分に直接ぶつかってきますよね。だから、準備するものは、全部自分で厳選します。』

—— レースも、ツーリングも、準備の段階から、すでに始まっているわけですね。

西山『準備も楽しいですよ。日常の煩わしいことが、すごくシンプルに考えられてきます。』

—— そうしたモノの考え方の傾向というか、自分のあるがままへの欲求というのは、いつ頃から強くなってきたんでしょう。

西山『いやぁ、これは小さい頃からですねぇ。動くものが好きで、どこか行くのが大好きで、放浪癖がありました。僕は子供の頃から自転車が好きでね、高一の時に京都から舞鶴、山陰を通って下関から関門トンネルを抜けて、熊本、阿蘇山、別府まで行ったことがあります。』

——高一で？一人ですか!!

西山『そうです。当時はユースホステルも安くて、一泊二食で800円でした。お昼を食べても一日千円あれば済みましたからね。四国、北陸、伊豆など、親の仕事を手伝ってもらったお金を貯めてね、よく行ったもんです。』

——西山さんはエライですね。中学の頃は新聞配達、大学時代もお仕事を持ってたし、自分の好きなことに使うお金は、子供の頃から自分でまかなってたんですね。

西山『いやぁ、ウチが商売屋ですからね。よく親とケンカもしました。すると“あー、自転車でどっか行きたいなぁ…”とか思いましたね。当時、本で読んだんですけが、カナダには“トランス・カナダ・ハイウェイ”っていうのがあって、日本でいう国道一号線のような感じなんです。太平洋から大西洋まで、まっすぐに伸びてるんですね。もう、憧れましてね。あぁいいなぁ、行きたいなぁ、と地図をみては楽しんでました。ケンカすると、家出して行ってみようかなぁ、なんて（笑）。』

—— 今なら行けるんじゃないですか。あきらめないで。

西山『もう、そんな体力ないですよ（笑）。』

INTERVIEWER

花井　美紀

（株）コミュニケーションデザイン代表
イベント司会・コーディネイター、
ビジネスマナーインストラクター、
信用金庫協会女子職員講座の専任講師。
TV、ラジオ等で現在活躍中。

――しかし、西山さん。レースにツーリングにと、余暇を十分に満喫してらっしゃるようですが、二階にあるたくさんの本、読む時間なんてあるんですか。

西山『ありますよ。風呂はいりながらとかね。まあカタログとか図鑑なんかは、ある程度、持ってる喜び、みたいなとこがありますけど。』

――毎日、お仕事が終わると家へ直行。犬の散歩して、バイクいじって、読書ですか。

西山『友達と酒飲んだりもしますよ。カラオケより“話”ですけどね。今読んでる本のこととか、オートバイの乗り方についてなんか、もうエンエンと話します。僕、芝居も好きでしてね。太地喜和子さんの近松心中も観たし、もう終わってしまいましたが木の実ナナさんのショーガールは18の時から毎回通ってました。あと、金子由香利さんのコンサートとか。』

――まぁ、ホントに好きなコトが多くて、退屈しない人ですねぇ。退屈って感情、わかんないでしょ。

西山『あ、今ね、オムレツに凝ってるんです。フライパンも買いました。』

――オムレツ？また、どうしてですか。

西山『単純に僕、卵が好きなもんですから。どうせやるなら、おいしいのがいいですよね。』

――プレーンオムレツですか。むずかしいでしょう。フライパンの柄をトントン叩いて巻くのって。コックさんの修業はオムレツに始まってオムレツに終わる、と言いますし。

西山『ある程度、3回に1回はきれいに巻けるようになりましたよ。中は半熟で、バター溶かし込んで。生クリームはコーヒー用で代用してますけど。』

――日本人は余暇を楽しむのが下手だとか言われますけど、西山さんに限っては全く違いますね。お仕事もちゃんとしてらっしゃって、なおかつ、ですね。ある意味では、非常に贅沢な生活に思えます。うらやましい。

西山『確かに“退屈するヒマ”っていうのはないですね（笑）。』